

## 私と幼稚園

—現在いまに続く道の始めとして—

豊田 一秀

沈じんちやうげ丁花の香る頃に

二月の下旬、園庭の沈丁花が咲き始めた。近くを通ると、懐かしい春の香りが流れてくる。卒園も近いな！そんな独り言を頭の中でつぶやきながら、私は日毎に膨らんでくる蕾を楽しんでいた。

ある日、年少組の女の子が二人、背中を寄せ合せて

花の前にたたずんでいる。ふと見ると、一人の女の子の手に手折られた沈丁花の小枝がある。私は思わず「このお花は大切な花だから採らないでね」と話す。二人の、しまった！ というような、少し気まずそうな表情が「そんなこと、わかってるわよ！」と言っているように、余計なことを言ってしまったかな、と私に思わせた。

それからしばらくして、さっきの二人組を園庭で見かけると、どうしたことか、今度はもう一人の女の子の手にも沈丁花の小枝がある。そして、二人して、さも嬉しそうに各々の手に持った花に鼻を近付けて香りを楽しんでいるではないか。私は「アレッ！」と思いつつも、同時に、自分が言ったことを思い出していた。大事な花だから採らないで……とは、その時の二人組に対して何とそぐわない事を言ってしまったことか……二人は、花の大切さを知らずに採ったのではあるまい。むしろ、大切な花だからこそ採ったのではなかったのか。

もちろん、沈丁花は幼稚園の大切な花である。もしも、多くの子どもが花を手折ったら、たちまちになくなってしまいうだろう。しかし、その事実をさておき、自分達が見つけた小さな「春」に心を動かされ、春を手にとろうとした二人。その二人にとっての小枝の価値は、その時、大人のありふれた価値観を超えて貴重ではなかったのか……。

私は二人に気づかれないように横を通り過ぎた。

願わくば、沈丁花の香りが二人の心にいつまでも在りますように。

右の文章は、私が園長をしていた頃に書いた短文である。短い期間であったが、私は自分が卒園した幼稚園の園長を務めていたことがある。ご縁を得て、卒園後四三年を経て、自分が園長として大和郷幼稚園に戻ったときには、実に不思議な気持ちがあった。自分が育てられた、その園の園長になる。育てられてきた者が、育てる者となるという「時の巡り」を思わずにはいられなかったのである。

私は、子どもたちに、私の過ごした幼稚園時代のよう日々を与えたいと考えた。幸いなことに、幼稚園の保育に対する基本的な姿勢は、大きくは変わっていないので、私は、自分が以前、幼稚園で担任を経験しているということもあり、できるだけ子どもの中にいるような心がけた。時代が変わり、親が変わり、社会が変わったが、目の前にいる子どもを中心として、その子が日々楽

しく過ごせる保育、そして、その子の将来に亘る幸せに  
続く保育を考えていけば大きく間違えることはないと思  
えた。雇われ園長としての任務は厳しかったが、子ども  
の近くで働く喜びは大きかった。

私は、園長を退いた後、大学の教員となり教員養成に  
携わりつつ今日に至っているが、現在の自分を思うにつ  
け、そのルーツとして自分の幼い日々と、幼稚園を思い  
返さずにはいられない。そもそも、私はこんな子どもで  
あったらしい。

### 幼い日の思い出と幼稚園

自分の幼稚園時代を語ろうとする時、まず、最初に私  
がどのような子どもであったのか語らなければならぬ  
だろう。これは母から聞いた話なので、「私は知らない  
い！」と声を大にして言いたいのだが……。

私は、相対に扱いにくい子どもであったようで、気に  
入らないことがあると、車の通る道でも、どこでも、

口を尖らせて大の字に寝てしまい、動こうとしなかった  
そうだ。知能検査を受けた時も、私はテストの顔と態  
度が気に入らなくて、「朝、どんなご飯を食べました  
か?」「食べない!」「何色が好きですか?」「何色も  
キライ!」といった調子で、何を聞かれても全て否定形  
で答え、検査結果には「反抗的であること以外、何もわ  
からない」と書いてあったという。

そのような子どもであったから、幼稚園の入園面接が  
あった時も滑らかにはいかなかった。面接で出されたお  
もちゃが気に入ってしまい、「もつとアソブ!」と言っ  
て聞かなかったそうだ。困った母は、それでは先生に  
伺っていらつしやいと言うと、私はつかつかと一人で面  
接室に頼みに戻り、部屋から出てくると、心配顔の母を  
よそに、「チエツ、ダメだつてさつ!」と、ひとこと  
言ったという。

この自己中心、頑固を絵に描いたような子どもにとっ  
て、大和郷幼稚園は実に居心地が良かった。毎日が面白  
く、やりたいことに満ちていた。私は特に外遊びが好き

であった。思い出はいろいろある……すべり台では普通に滑るだけでは満足できずに、友だちと「勇氣コンテスト？」のようなことをして、様々な技を考え出して滑っていた。目をつぶって滑る、後ろ向きで滑る、寝て滑る、腹ばいで滑る、腹ばいで頭を下にして滑る……一番、高度な技は、たしか、頭を下にして上を向いて目をつぶって滑るといふものであったと思う。地面にひどく頭をぶつけた記憶がある。

マサキちゃんという親友がいて、彼との思い出も枚挙にいとまがない。例えば、彼とは秘密の空間を共有していた。そこは、大人の入れないような物置の裏を通ってたどり着く閉ざされた空間で、私とマサキちゃんはそこで立ちションベンをして男の友情を確かめ合っていたのだ。

担任の先生からも多くの出来事を語り伝えられている……片付けの時間になり、大型積み木をしている私に、先生が「かずひでちゃん、自分が使ったものは片付けましょうね!」とおっしゃったそうだ。すると、私は一つ

ひとつの積み木を手にとっては「これは使ったかな……?」と本気でつぶやいていたという(私は、当時、日本語に対して非常に正確、かつ厳格な用法を用いていたのである)。

担任の先生は清水久仁子先生とおっしゃって、本当に優しい、美しい先生でいらした。遠足の時に、先生と一緒ににお弁当を食べていて、ふと見るとアリの巣が目に入った。「お腹が空いた!」というアリの声(?)を聞いた私は、「アリが欲しがっているから先生の玉子焼きを頂戴!」と言うと、先生はご自分の玉子焼きを少し下さった。それを見ていた他の子どもたちも「僕もアリスんを喜ばせたい!」と言い出し、とうとう先生の大切な玉子焼きは、ほとんどアリへの贈り物となってしまう



た。そんな、素敵なお若い先生でいらした。

私が先生に關してはつきり覚えていた記憶は、お弁当の時である。先生がお茶を一人ずつ、コップに入れてくださるのだが、私はその途中、注がれているお茶にスプーンを差し込んだ。まさかそうなるとは思っていなかったのだが、お茶は美しい噴水のように辺りに飛び散って、机の上は大変なことになった。私は、確かに「しまった！」と思ったのだが、この責任はお茶を入れていた先生にあると思っていた。ところがこの時はやはり、さすがの先生も笑いのない顔で私に後始末をするようにおっしゃった。今になれば、この時の先生の「いいかげんにして頂戴！」というお気持ちは痛いほどわかるが、その時は「なぜ僕が!？」という不本意な気持ちであつたことを覚えている。かくも、かくも、このような子どもであつたのだ。

総てがこの調子で、私は毎日が面白くて仕方なかった。自分が教育されているなどとは少しも感じていなかった。唯々、毎日、幼稚園に行くのが楽しかった。私

は許容され、可愛がられ、ゆつくりと自分を外界に広げてゆく時間と環境を与えられた。今となれば、この奥にどれ程の先生方の献身とご苦労があつたのかと、感謝と申し訳なさで一杯である。

これもはつきり覚えているのだが、小学校に入った時、同級生が少し障碍をもつた子どもを追い回しているのを見て、ハンディーをもつた子をいじめる気持ちが全く理解できなくて、私はその子を庇っていた。自分が大切にされた分、人を大切にすることが自然に育つていたのでと思う。

幼稚園時代の仲間との友情はその後も続き、今日に至っている。これも、付属でない幼稚園としては異例のことであろう。

### 竹中京子先生との出会い

当時、大和郷幼稚園の主事（主任）は竹中先生でいらした。竹中先生は私にとっての大恩人で、この先生のお陰で私の一生が導かれたと言っても過言ではない。幼稚

園を卒業した後も、自宅が幼稚園の三軒隣であったこともあつて、学校から帰るとよく幼稚園に遊びに行つてゐた。職員室はいつも楽しそうで、竹中先生は私を温かく迎えてくださった。その後、私が中学、高校になつても、いつも私の心には担任の清水先生、そして、竹中先生がいらした。

私が大学生となり、幼児教育の道に進もうと考え出した頃、先生は大和郷幼稚園を退職され、十文字幼稚園の主任をされていた。私が、大学で幼児教育のコースに進もうとしているとお話しすると、先生は遊びに来るようにとおっしゃつて下さつた。そして、数か月に渡つて、週に一度、実習をすることを許して下さつた。担任の先生がお休みの日、その先生に代わつて、私に担任をさせて下さつたこともあつた。あの当時の私に……なんという先生の勇気であらうか。

大学三年の冬であつたと思うが、竹中先生は当時、お茶の水女子大学の教授でいらした津守眞先生を紹介してくださいました。そのご縁で、私は愛育研究所の中にあつた

当時の家庭指導グループのお手伝いをさせて頂けることとなつた。ここでの、障碍をもつた幼児との出会いは、現在も続く先生方との出会いとともに私のもう一つの宝である。その後、津守先生にはお茶の水女子大学附属幼稚園に紹介して頂き、紆余曲折を経て今日に至るのだが、これも、元をただせば総て幼稚園時代に出会つた竹中先生のお導きだと考えている。

ある先達の教育者が「教育とは、教室で教わつたものを全て忘れてしまつた後に残る余香だ」と語っている。私は幼稚園時代、竹中先生、清水先生に一生続く香りを頂いた。そしてその香りが、これまで私を導き続けてくれていると思う。私はこの香りを基に担任をし、園長をし、今は将来の保育者を育てている。

花盗人の、あの二人の少女も、今は十歳になつてはらずである。沈丁花の香りと共に幼稚園の庭を思い出していてくれたらよいな、と願う私である。

(玉川大学)